

## (論文内容の要旨)

本研究の目的は、木器加工技術に立脚して、古墳時代から奈良時代の木器様相の実態を把握し、当該期の木器研究を一連の流れとしてとらえることにある。古墳時代以降、木器製作の技術基盤の移行が正しくとらえられておらず、「集成加工」された当該期に特徴的な木器の分析が不十分であった。また、消耗率の差や「新しい種類の木器」の創出などの様々な要因によって、弥生時代以降の木器様相には見かけ上の分断が見受けられた。そこで、古墳時代から奈良時代にかけての木器研究に、「集成加工」や「結合」という当該期に特徴的な木器製作の技術基盤という視点を導入した。そして、技術基盤をなす単位である「板材」や「紐」の検討を通して、当該期の木器研究を一連の流れとしてとらえるとともに、そのための考古学的方法論を創出し提示することを目指した。

著者は、木器製作の技術に注目して、除去加工や切削という技術を用い、木のブロック(塊)を加工の最小単位とする〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉と、集成加工や結合などの加工技術を用い、板材や結合補助具としての紐を加工の最小単位とする〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉を設定した。加工技術として並列の関係にあるこれらの技術基盤は、鉄器の利用やそれに伴う針葉樹利用を起因として、時期幅を持って技術基盤ⅠからⅡへと移行する。木器の検討においては、これらの技術基盤の違いを念頭に置き、それぞれの技術基盤にふさわしい研究方法を用いる必要がある。しかし、現在の木器研究においては、技術基盤の移行を正しく認識できていなかったために、それぞれの技術基盤にふさわしい検討が不足していた。また、技術基盤の移行が徐々に進行したこと、移行後も〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉を背景とする木器は存在し続けたことも、技術基盤の把握を複雑にしている。そこで、まず序章では、古墳時代から奈良時代の木器研究における見かけ上の分断の存在と、その背景を整理した。そして、この分断を解消するため、以下のような検討をおこなった。

第1章では、これまでの研究における未成品観・木器観の転換を図る必要性を論じた。従来の研究では〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉に移行する古墳時代以降も〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉の最小加工単位であるブロック(塊)などの未成品に着目したために、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉を背景とする木器を正しく評価できていなかった。また、古墳時代以降に〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉を背景とする未成品が出土しなくなる状況を、生産用具の「消費集落と生産集落の分離」という社会的システムの変化として説明してきた。そうではなく、個々の器種の変化およびその組成の変化を正しく理解し、従来注目されてこなかった板材や紐を〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉にかかわる未成品であると評価することによって、こうした変化を技術基盤の移行としてとらえることが可能であることを論じた。

以下の章では、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉を背景とする木器とその変遷に着目しながら、古墳時代以降の各種木器類の検討をおこなった。第2章では、板材を集成加工する木器(箱、腰掛脚、四方転びの「箱」、二脚台、蟻溝技術、北部九州型机)の製作技術を具体的に明ら

かにすることで、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉における木器の特性を把握した。これらの木器の中には二脚台のように、一つの器種において〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉から〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉へ移行したものがあつたことも明らかにした。

第3章では、弥生時代後期から古墳時代の精製品をとりあげた。これまでは、精製品を作る木工技術者は、この頃からあらわれる土豪族的な支配者層の奢侈品を製作する部門に吸収されたという歴史観が、研究者の間で長らく共有されてきた。しかし、〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉を背景とする精製高杯を分析した結果、文様の割付技法には技術的な衰退がみられた。その一方で、団扇形木製品のような、外来のあたらしい「権威を象徴」する木器に移行することを確認した。

第4章で取り上げたサクラ樹皮紐は、従来その重要性が認識されていなかった。本章では、出土品から樹皮紐の製作工程を明らかにし、その強度についても実験により明らかにした。また民俗事例を参照しつつ、樹皮紐が結合補助具として〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉における最小加工単位であると考えた。以上の検討により、遺跡から出土するサクラ樹皮は、自然遺物ではなく、人為的に剥ぎ取られ遺跡に持ち込まれた「考古遺物」であり、木器製作にかかわる未成品として認定することができた。これらの樹皮資料は、発掘現場において適切に取り上げられ、報告され、資料化されることで、あらゆる時期、階層の遺跡における木器生産の検討に重要な手がかりをもたらすであろう。

第5章では、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉の最小加工単位である板材と樹皮紐からなる曲物を取り上げ、その系譜の詳細を追った。底板に木材を用いる曲物の初現期は、弥生時代中期後葉である。出現期には、蓋、身ともに曲物で作られる容器と、蓋は削り物で身が曲物で作られる容器とがある。また、木材を削り込んで脚部を作り出す形状の曲物もあり、〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉と〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉を複合した容器であったといえる。古墳時代中期以降、底板に「削り物の技法」が用いられない曲物が出現する。古墳時代後期以降は、同様の形態の底板に側板が伴う例が確実にみられるため、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉を背景とした曲物は古墳時代後期に成立したといえる。ただし、資料が増加すれば、古墳時代中期に遡る可能性もある。一方で、出現期より「道具箱」などとしてとらえられていた曲物は、古墳時代後期以降に小型化していく。そして皿・盤などとの法量の共通性から、曲物に「食膳具」としての性格が付与されたと評価する。このような食膳具としての曲物は、新しい種類の木器の創出としてとらえることができる。しかし、製作技術の基盤としてはそれ以前のものとも共通しており、古墳時代からの連続性の中で捉えることができる。つまり、新しい種類の木器の創出としてとらえられている曲物も、その技術基盤に注目することで、古墳時代からの連続性の中で理解することができる。

第6章で取り上げた編台は、〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉を背景とする木錘と、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉を背景とする目盛板から成り立つ複合的な道具である。本章では、編台の目盛板に着目することにより、編台製作の時期ごとの様相を明らかにした。古墳時代前期までは、目盛板は建築部材を転用、もしくは各遺跡で蓄えられている板材などを使って製作された。

古墳時代中期以降、新たな器形の木錘が出現し、目盛板も専用の器形が作り出された。これらに用いられたスギ、ヒノキ、モミ属などの針葉樹は、各地域で利用される針葉樹材の傾向と一致することからも、各地域で作られたことがわかる。また、左右両端を細く作り出す形状については、製作者が共通の認識を持っているが、その形態にはバリエーションがあることから、各集落で製作されたと考えられる。奈良時代においては、郷、郡、国のあらゆる性格の遺跡から出土しており、各遺跡で製作された編台を用いて俵や薦などが生産されていたと判断できる。また、5世紀前半頃を境に、編台の目盛板と木錘の形態は大きく変わる。この時期には、須恵器生産をはじめさまざまな分野で技術革新がおこっており、それら最先端の技術が朝鮮半島からもたらされたと考えられる。その一方で、「木器製作の技術基盤」には大きな変化は見られない。これは、編台製作を担っていた人々が変わらなかったことを示している。

第7章では、消耗率の高い木器の代表として、木製祭祀具を取り上げ、その製作方法と使用方法を検討した。〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉が優勢となる時期以降において、最小加工単位の板材を利用して作られる木器は、その製作の加工工程を認識しづらく、十分な議論ができていなかった。そこで、それぞれの木器の年輪に着目し、その年輪間隔をパターン化して比較することで、同一材か否かという視点から、製作工程を明らかにした。〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉のような未成品を認識することができない時期において、板材そのものが持つ年輪幅という情報にアプローチすることは、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉における木器製作に論及する上で有効な手段である。木製祭祀具からは、祭祀にあたって祭祀行為者が用意した（あるいは用意された）板材を使って、その場で製作し、使用し、廃棄するという短いサイクルの木器製作・使用の様相をとらえることができた。このことはまさに「一時の使用のうちにすてきる」様相を示している。また、一括で出土した祭祀具と割り裂いた板材を同等に、現場で記録して取り上げ、分析をおこなった。それによって、板材をどのように割り出し、祭祀具を作り出していたか、という製作工程を明らかにすることができ、また原材の復元をおこなうことができた。これまでの調査事例の多くは、祭祀具などが一括で出土した場合にも、そこから「完成品」としての齋串や人形を取り出して分析しており、その背後にあるはずの製作の文脈は分断されてしまっていた。伴出する板材などを完成品と同等に評価することで、初めて〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉における木器製作の様相を明らかにすることができる。また、年輪年代学を用いた学際的な研究においては、同一材という視点だけではなく、条件によっては暦年代を付与することができることも利点である。年輪年代学の成果をこのような木器製作の詳細な復元に利用する初めての事例であり、今後このような手法が〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉を背景とした木器の分析にますます取り入れられていくだろう。

本研究においては、「木器製作の技術基盤」という視点を導入し、それぞれの木器を整理することで、その概念の有効性を確認した。まず、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉における最小加工単位として板材や結合補助具としての紐を設定することで、従来の未成品観を転換することができた。そのうえで、消耗率の高い木器、生産・生活用具のそれぞれについて古墳

時代からの継続性に重点を置いた検討をおこなった。その結果、序章で指摘した分断を解消し、曲物に関して指摘されてきたような、新しい種類の木器が創出され時代の大きな転換点と評価されてきた事象についても、古墳時代からの継続性の中に位置付けることができた。〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉が優勢となる時期以降における木器製作について、板材や紐に着目することで、製作場所の認定と、木器製作手順や原材復元に取り組み、それらを明らかにする方法を提示することができた。

以上、〈木器製作の技術基盤Ⅰ〉から〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉への移行に着目して論じたが、〈木器製作の技術基盤Ⅱ〉の根幹にある板材の流通については深く議論を進めることができなかった。板材の流通については、建築部材等の板のサイズや法量も併せて検討していく必要がある。集落遺跡における建築部材の占める割合は高い。このような集落内の板材については、第7章で扱った木目の年輪年代学的手法を用いた分析によって、搬入形態や原材等に言及することが可能になると考えている。これらの木材の供給元に迫ることが将来的な課題であり、今後、都城をフィールドとして木器の分析を進める中で、各地の事例に立脚しつつ論及したい。